

# 都市再生の担い手の取組事例について

## 熊本まちなみトラストの活動概要について

Vol.17 2006.12.15

平成 18 年 7 月 4 日に都市再生本部会合が開催され、「都市再生の担い手について」が本部決定されたところである。当日の本部会合においては、実際に都市再生の担い手として地域で活動されている方にお話をお伺いする機会を得た。本レポートでは、「熊本まちなみトラスト」の富士川一裕事務局長の話に基づき、都市再生における担い手の重要性について考察してみたい。

### 熊本まちなみトラスト設立のきっかけ

熊本まちなみトラストは、平成 9 年に設立された会員数 60 人程度の市民団体である。熊本市内にある大正 8 年に建造された「旧第一銀行社屋」の保存・活用運動を皮切りに、「記憶の継承」を基本コンセプトに据え、現在も多様な活動を展開している。以下では、熊本まちなみトラストの活動の一端を、紹介していきたい。



写真 1：旧第一銀行

### 河原町プロジェクト～発火点

熊本市新町古町地区は、400 年前の町割がそのまま残る城下町である。明治大正期には、商品取引所や市場、卸商が集積する、市内で最も繁華な場所だったが、近年は衰退が続いている。

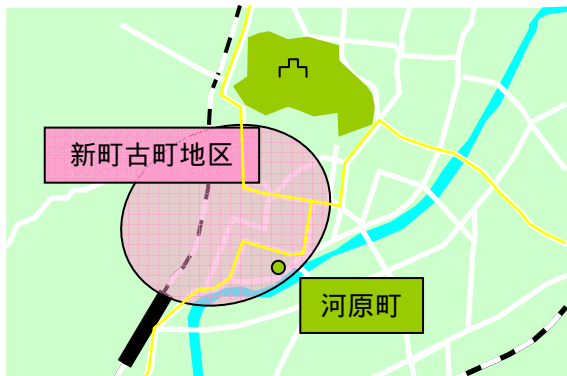


図 1：河原町の位置

古町地区内にある河原町は、第二次世界大戦後、繊維問屋街として大変な賑わいを呈し、最盛期の昭和 40 年頃には 100 店舗程の店が軒を連ねていたが、昨今はそのほとんどが空き店舗状態になっていた。

このいわゆるシャッター街で、「路地見て一杯」という飲み会を企画したところ、予想以上の若者が集まり、その中の二人からこの場所でアーティストショップ（工房と販売機能を併せ持つ店）を出したいという申し出を受けたことが、このプロジェクトを前進させる発火点となった。

平成 15 年度には、「全国都市再生モデル調査」に選定され、民間が主体となって、共同ビル等の錯綜した権利関係の整理と、場所や業種によって異なる、入居時



写真 2：閉店が目立っていた問屋

に最低限必要な設備の装備内容に関する調査とを専門家に委託した。モデル調査に選定されたことにより世間の耳目が集まって、入居希望者が増加するとともに、家主の理解が得られやすくなり、中には、共同ビルの 2



写真 3：新規出店が始まった問屋

コマを、利殖の目的ではなく、若者のインキュベーション装置として買い取った住民も出た。現在では、27 店舗が開業（平成 18 年 11 月現在）し、地域の活性化に寄与して

いる。1号店となったアーティストショップの影響もあって、アトリエやギャラリー、カフェ等の店が多いが、旅行代理店や居酒屋の出店もある。河原町でギャラリーを営む黒田恵子さんは言う。「私自身、近くに住んでいながら、店を出店するまでは河原町がどんな街か知らなかったが、この街を一目見て好きになった。新たに醸成された河原町のクリエイティブな雰囲気を活かしつつ、コミュニケーションが濃密で、豊かな時間を過ごせる街にしていきたい。」



写真4: アーティストショップ



写真5: カフェ・ギャラリー

### 風流街(ふるまち)商栄会～波及

こうした河原町での若者の動きに刺激される形で、古町地区の地元商店主たちが新たな商店街組織として「風流街(ふるまち)商栄会」を立ち上げた。商店主たちは地域の「旦那衆」となることを目指して和服での街歩きや、熊本民謡「おてもやん」の作詞・作曲者の墓前祭、フリーマーケット等のイベント開催などに取り組んでいた。これらの活動に、先の河原町で新規出店した若者たちが参加し、またその若者たちが主催したフリーマーケットに地元の商店主たちが参加することによって、まちづくりの担い手間の連携意識が醸成された。



写真6: 旦那衆



写真7: 街の駅

来街者に対しても、店舗に試行的に「街の駅」の看板を掲げ、お茶やトイレ等サービスを提供する活動も開始、近々には、熊本弁で散策を意味する「きゃあめぐろ」という言葉を用いて「きゃあめぐろ 立ち寄

りどころ」として、12の店舗が参画し、本格実施に移される予定である。この企画に参画する、築140年の古民家を改装して履物屋を営む早崎友治さんは言う。「河原町に新規出店した人たちや、風流街の他の商店主の人たちの活動の影響を受けて、自分もまちづくりに携われないかと思い立った。店を始めて、今までこの街を訪れることのなかった人たちと、話をすることができるようになった。」このように新旧、内外の人の融合が河原町プロジェクトの波及効果として表れている。

### 精霊流しの復活～再び「まちに意識を」

熊本まちなみトラスト事務局長の富士川一裕さんは、街の空洞化問題がこれほど深刻化した大きな要因は、街に対する地域住民の意識の空洞化にあると指摘している。

こうした問題意識に対する一つの取組として、昨年(平成17年)熊本城の横を流れる坪井川で60年ぶりに精霊流しを復活させ、今年も引き続き実施した。告知、会場準備、受付、灯籠流しとその後片づけに至るまで、地域住民はもちろんのこと、行政や企業等多様な主体が参画し、一人一人が「まちに意識を向ける」契機になったことの意義が大きいと富士川さんは言う。

以下では、熊本まちなみトラスト、ならびに富士川さんの活動の中から、この他にいくつかの事例を紹介したい。



写真8: 坪井川精霊流し

## 【熊本ペロタクシー】

ペロタクシーとは、屋根付き三輪自転車タクシーのことである。この乗り物を活用して地元の学生 2 名を中心として地域住



写真 9: ペロタクシー

民や熊本まちなみトラストが加わり、NPOを立ち上げて事業を開始した。相談を受けた熊本まちなみトラストは、自らの活動拠点であるフロアーの一部を、このNPOの活動拠点として提供するとともに、まちづくり活動を支援する団体からペロタクシー事業に充てるための資金助成を受けた。富士川さんは、両者の活動拠点が同じフロアーにあることによって、まちづくりに対する相互の連携、補完、刺激等の面で相乗効果が大きいと言う。

観光客に対しては、運転手が地元の歴史や地域資源の紹介、案内を心がけている。高齢者や通院者の移動補助手段としてのニーズも見込んでおり、今後は地域に約 40 箇所ある病院・医院にペロタクシー事業の賛同者になってもらい、最寄りの停留所や薬局までの移動手段としての利用をPRし、通院がてら地域資源の発掘、発見の一助となる期待も抱いている。移動の迅速性だけを捉まれば、ペロタクシーは他の交通手段に劣るが、上に述べたように、コミュニケーションの手段として見ればその果たす役割は大きい。この事業を立ち上げた熊本学園大学の大学院生である草野泰宏さんは言う。「この事業をやるようになって、地域のことを勉強するようになり、日々新たな発見がある。地域の歴史の紹介もさることながら、飲食店もタウン誌等の情報に頼らず、自分たちの目や舌で確かめた上で、これはと思った店しかお客さんに紹介しないようにしている。今後も自分なりのこだわりを持ったおもてなしを心がけ、熊本のことをもっとみなさんに知ってもらいたいし、好きになってもらいたい。そして、行く行

くは、この事業をライフワークにしたいと思っている。」

富士川さんも、熊本市内には比較的大学の数が多く、学生たちのパワーが、まちづくりに及ぼす影響は大きいと言う。上述の草野さんも、大学の先生に勧められて、まちづくりワークショップ(注 1)に参加したことがきっかけで、ペロタクシー事業に挑戦してみようと思ったと述べている。

(注 1) 本来作業場や工房を意味する語。ワークショップでは、ファシリテーターと呼ばれる司会進行役の人が、参加者が自発的に作業をする環境を整え、参加者全員が体験するものとして運営されることがポピュラーな方法。ワークショップの効果として期待されているものに、参加者同士の体験共有、意見表出、創造表現、意見集約その他のコミュニケーションを深めることが期待されている。

## 【上熊本駅舎保存活用運動】

新幹線建設と鉄道高架事業に伴い、大正 2 年築の JR 上熊本駅舎が取り壊されることになった。この駅は夏目漱石や小泉八雲にゆかりの深い建築物であり、地元の住民団体や文化団体が保存・活用を訴え、熊本まちなみトラストもこの運動に参画した。活動の甲斐あって、元位置から南に約 30



写真 10: 移築された上熊本駅舎外観



写真 11: 市電停車場内部

メートル離れた市電の停車場へ駅舎正面部分が移築され、ホーム上屋として活用されることになった。

#### 【佐伯市(大分県)中心市街地活性化活動】

熊本まちなみトラストでの活動を通じて、富士川さんが蓄積した経験を活かした取組についても紹介したい。富士川さんは、佐伯市の中心市街地で市役所による道路改修が行われる機会に、その地域のリーダーといっしょに、最大の使い手となる地域住民の参画のもとに、沿道の建物の修景などに一体的に取り組むことが賑わい回復等に有効と考え、街歩きやワークショップを活用しながら、広く地域住民にまちづくりへの参画を促す粘り強い活動を推進した。この方式を貫徹した結果、住民発意による足下灯の設置や、自然石を配した舗装のデザインの採用等が決定された。

舗装整備終了後にも、沿線の店舗主は、クーラーの室外機やプロパンガスのボンベに目隠しの覆いを付けるなどの自主的な修景を行い、子供たちは、通りの入り口付近にある倉庫の外壁塗装を行う等、通りと沿道との調和を意識した活動に発展した。



写真 12：足下灯

## まとめ

まとめとして、熊本まちなみトラストの活動から、全国各地でまちづくりに取り組む担い手の方の役に立つと思われる視点について触れてみたい。

### 【まちに意識を向ける】

熊本まちなみトラストでは、街の空洞化を防止するには、個々の地域住民が「まちに意識を向ける」ことに力点を置いた取組を行うべきだという確信に根差した活動を行っている。いずれの活動をとってみても、内容やアプローチの方法は異なるものの、「まちに意識を向ける」という点では共通である。富士川さんは、まだまだ一部の人たちの「マニアック」な活動としてとらえられることが多いまちづくりに広く市民の意識を向けるには、まずは市民が身近に感じる生活環境の回復に目を向けた取組を行うことが有効だと言っている。

この点に関連して、他の地域でまちづくりに取り組む人たちの声をいくつか紹介したい。NPO法人フュージョン長池(注2)の理事長である富永一夫さんは、こう言っている。

「『自分はいずれ多摩を離れ郷里へ帰るので、多摩はふるさとではない』という考えを子供に植え付けるのはよくない。子供にとってのふるさとは多摩なのだから、それを誇ることができるようなまちづくりをするんだという気持ちを持つことが大事である。」

千葉県市川市で「1%支援制度(注3)」を導入した千葉光行市長は、平成18年3月に開催された「東京大学先端まちづくり学校 まちづくりシンポジウム」の場で「1%支援制度でよかった点は、市民がこれに参加することで、市内の市民活動、ボランティア活動を理解し、自分もこれに参加しようということにつながっていることだ。」と述べている。

兵庫県神戸市の真野地区(注4)でまちづくりに取り組む清水光久さんは、「長年にわたって活動をともししてきたメンバーを見てみると、皆『自分の街が好き』という思いに行き着く」と言う。あわせて自分の街は自分で作るという気概が肝要だとも述べている。

表現は異なるが、いずれも地域への関心を高め、地域に目を向ける姿勢を強める点が肝要だという点で共通していると思われる。これは取りも直さず、熊本まちなみトラストの「まちに意識を向ける」と同義である。これらから帰納的に類推すれば、「まちに意識を向ける」という視点は、まちづくりにとって、場所に左右されない普遍的なものと言えるのではないだろうか。

(注2) 東京都の多摩ニュータウン南西部の長池公園を中心に、住民の暮らしを様々な角度から支援することを目的に活動するNPO。平成18年4月からは、八王子市からの委託を受け、長池公園(20ha)の管理運営を行っている。また、富永さんは、フュージョン長池を母体としてNPOフュージョン(多摩市)を設立し、多摩ニュータウン全体の地域活性化支援、住宅管理支援、住まい作り支援、高度情報化支援、地域広報支援などにも取り組んでいる。平成17年4月からは、多摩市から「多摩NPOセンター」の運営を受託。平成18年4月には、国からの支援も受け、「暮らしと住まい相談センター(多摩市)」を開設し、主に高齢者の「住替え支援」を行っている。

(注3) 個人市民税の納税者が、自ら支援したい市民活動団体を選び、その届け出をすることにより、その納税額の1%相当分を市から団体に補助金として交付する制度。平成16年12月に条例として制定。

(注4) 神戸市の都心から約5km程度西に位置する長田区東南部の、工場、住宅、店舗が混在する約40haの区域。公害反対運動に始まり、緑化運動や福祉運動へとまちづくり活動が発展した地区。阪神・淡路大震災時には、震災3日目に真野地区災害対策本部が立ち上げられ、地元の住民自身の手によって地域住民を救援するという自助の活動が力強く行われた。

### 【まちづくり経験の有効活用と相互触発】

二つ目は、実際に現場で活動するまちづくりの担い手として積み重ねてきた経験が、他の担い手の間で有効に活用されているという点である。熊本まちなみトラストも発足から9年が経過し、まちづくりの担い手そのものとしての立場から、担い手支援の側に回るケースが増えている。また、佐伯市の中心市街地活性化活動の取組で紹介したように、富士川さんも、熊本まちなみトラストでの活動経験を他での取組に活かし、

自身で納得のいく結果が得られたと語っている。

これまで数々の経験をしてきた担い手の中には、取組や経験に裏打ちされた「目利き力」、担い手になろうとする人の「動機付け力」、NPO、町内会、商工会、大学、企業、行政等多様な主体相互の連携を実現する力(「連携力」)等が蓄積されている。

動機付けという意味では、先に紹介したベロタクシー事業を始めた草野さんも、ワークショップに参加した際、講師として参加していた富士川さんから刺激を受けたと言う。

連携という意味では、ベロタクシー事業では、熊本まちなみトラストの会員でもある病院の理事長に理解を求め、ベロタクシー事業の団体会員としても、良き賛同者になってもらっている。

今回このレポート作成にあたって、富士川さんに同行させていただき、現地で様々な方のお話を聞くことできた。その中で、相談や悩みを打ち明ける人たちもいたが、富士川さんはそれに対し、解決の糸口になればという考え方を示すことはあったものの、決して公式から導くような解を示すことはなく、まちづくりの主役は、あくまで地域の人たち自らであるという姿勢が感じ取れた。逆に、この地域でまちづくりに取り組む人たちにとって、富士川さんをはじめとする熊本まちなみトラストは、頼りがいのある相手であり、良き相談者になっている。富士川さんのほうから尋ねるまでもなく、自ら、今こんな状況で、今度はこんな取組を考えているという話をしてくれた人もいた。

国としても、こうした担い手支援の観点に着目し、地域でまちづくりに真摯に取り組む団体や人たちの一助になればという考えから、「苦労や課題を共有できるネットワークを国で作し、人の交流・情報交換によりまちづくり活動を継続していく環境を整備してもらいたい」という、富士川さんが都市再生本部会合で言及された内容を足

がかりとして、全国都市再生モデル調査に採択された団体を中心に、モデル的なネットワークを立ち上げた。既に実施した交流会に加え、今後はメーリングリストを活用した意見・情報交換の場づくり等、支援体制を整備している最中である。

(参考)

平成 18 年 7 月 4 日都市再生本部決定  
「都市再生の担い手について」(抄)

1. 様々なまちづくりの担い手の連携強化  
全国各地で行われているまちづくりの取組について、ノウハウ、人材、経験などの情報交換、意見交換、人材の交流などを通じて、多様な主体が、自主的・自発的な連携を円滑かつ活発に実施することができる環境整備を行う。

2. まちづくりの担い手の裾野の拡大  
地域のさまざまな担い手が、まちづくり活動に、自律、協働して、持続的に取り組めるよう、担い手の裾野を拡大し、こうした取組を一層促進すべく、意欲を持った団体や、地域の居住環境の維持向上に継続して取り組もうとする団体等が、地域のまちづくりの担い手として十分に活動できるよう、関係法令等において、手続きや管理・運営への参画に係る位置づけの明確化を検討する。

3. まちづくりの担い手を支援する機関  
(担い手支援機関)との連携強化とこれらの機関の活動促進

まちづくりの担い手を支援してきている機関と行政機関との連携を強化するとともに、これらの機関間において、ノウハウ、人材、経験などの情報交換、意見交換、人材の交流、意見交換できる場の提供などを行い、これら機関の活動を促進する。

\* 詳細は別途都市再生レポートで解説予定

内閣官房都市再生本部事務局  
〒100-0014 千代田区永田町 1 丁目 11-39  
永田町合同庁舎 3 階  
Tel: 03-5510-2168 Fax: 03-3591-0022  
Email: toshisaisei@cas.go.jp  
お問い合わせ先: 仲野

本レポートは、都市再生本部ホームページにおいても掲載しています。

<http://www.toshisaisei.go.jp/>

これまでの都市再生レポートも掲載していますのでご覧ください。

- No. 1 「魅かれ合うまちとアート～「全国都市再生モデル調査」の結果から～」
- No. 2 「名古屋堀川の再生～規制緩和+市民の熱意で水辺都市再生へ～」
- No. 3 「琵琶湖・淀川の再生」
- No. 4 「「全国都市再生」の取組みと成果～全国都市再生モデル調査から～」
- No. 5 「都市再生事業を通じた地球温暖化・ヒートアイランド対策の展開(第1回)」
- No. 6 「第14回都市再生本部を開催～防犯対策等とまちづくりの連携協働による都市の安全・安心の再構築～」
- No. 7 「歴史的たたずまいを継承した街並み・まちづくり」
- No. 8 「都市再生事業を通じた地球温暖化・ヒートアイランド対策の展開(第2回)」
- No. 9 「大都市等の魅力ある繁華街の再生のための連絡調整会議を開催」
- No. 10 「中部圏ゴミゼロ型都市推進協議会を設立」
- No. 11 「東京・大手町地区の再生～公民連携による連鎖型再開発への挑戦～」
- No. 12 「第15回都市再生本部を開催」
- No. 13 「大阪圏における生活支援ロボット産業拠点の形成」
- No. 14 「「全国都市再生」の取組と成果～日口友好最先端都市わっかない～」
- No. 15 「大阪圏におけるライフサイエンスの国際拠点形成～創薬・再生医療を核とした関西の取組～」
- No. 16 「海の再生に向けた取組」

次号以降の都市再生レポートの配信を希望される方は下記ホームページにて、必要事項を記入の上、送信してください。

また、都市再生レポートについて、幅広く皆様からのご意見をお待ちしています。

<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tosisaisei/goiken.html>